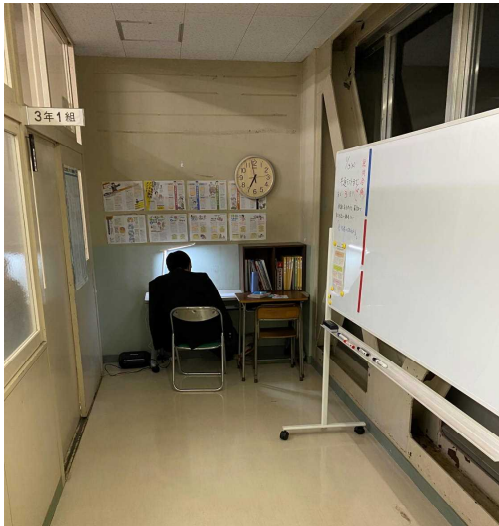


◆ 厳寒の季節に ◆



初めてとなる「大学入学共通テスト」が終わった。

「思考力、判断力、表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視した問題作成」（大学入試センターHP）が重視されたこともあり、試験問題のページ数が増えた教科・科目が多くなった。試験明けの月曜日から3年生の担任が日々生徒の相談に乗っている。

ところで、年明けのあいさつでも話したけれど、去年は作曲家ベートーヴェンの生誕250周年。そんな中、NHKのEテレでは、稲垣吾郎さんがアンバサダーとして、ずっとアニバーサリーイヤーの特集を続けていたので、ご覧になった方もいるかもしれない。

有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」後の彼の曲はとても力強い。『第5交響曲』（我が国ではもっぱら「運命」といわれるが、正しくは『交響曲第5番 八短調 作品67』）の最終楽章は壮絶である。聴力の衰えを自覚しながらよくもこのような力強い音楽が紡げるものだと思ってしまう。それから晩年の『大フーガ』（変ロ長調 作品133）。この頃の楽聖はすっかり聴覚を失っていたとされるが、4つの弦楽器のみの音楽であるにも関わらず、演奏される不協和音や複雑なリズムはあたかも現代音楽のようで慄然とする。一度聴いてみて欲しい。

これから3年生は私立大学、そして個別大学の試験に臨む。大寒から立春までの今の時期は厳しい寒さが続く頃でもある。しかし、「冬はつとめて」ともあるように、早朝の凜とした雰囲気は『大フーガ』にも通ずるものがあるように思う。

自己採点の結果は、全ての結果ではない。これが決定的なものではないことをもう一度確認しよう。これからの心持ち、そして丁寧な取組、戦略が大切になってくる。どうか、この『大フーガ』を書いていた時のベートーヴェンのことを思い出して欲しい。作曲家として致命的とも言える聴覚の衰えの中で作曲し続けた気概に思いを馳せよう。「苦悩を突き抜けて歓喜へ」まさに『第5交響曲』そのものじゃないか。時間はまだまだたくさんある…。